

拾遺愚草員外雜詠

一字百首

一句百首已上建久元年六月

伊呂波四十七首

二度同年六月

文字鑑哥廿首

同年同月 三十一字哥二度

十五首哥

十三首哥已上二度

後書加
文集百首建保六年

四季題百首承久二年秋

韻字四李哥同年

已上月時終篇狼藉左道依有其恥雖不加入家集其中一兩首撰取哥仍追書入草子與

建久元年六月有觸機事籠居依然書出上字百三時詠之

春 本雖無却分爲一見安言

あらたまのとしをひとせかさぬとや霞も雲も立はそふらん

さゆる夜はまた冬ながら月かけのくもりもはてぬけしきなる哉

かすか山てらす日影に雪消てわかなを春とまづはしりける

過かてにつめとたまらぬからなつなうわかくなく鶯のこゑ

路や

み山木のかすみは雪のうへとて猶雪うつむ草のいはかな

虫のねはねぞめの夢におほえつゝ秋の春にも成にける哉

めつらしきおほき人のあつさるはるのまとわのあとをたつねて

軒はにそまた面影はみえなからさめゆく夢も梅のにはひに
 春の夜のなかはの月の月かけのおほけならす身にもしむ哉
 なからへん命をいつとおもふにも後とまつへき花のかけかは
 たれすみて心のかきうつくすらむ花にかすめるさの山きは
 まとしに花ふく風のすきぬれはあつめぬ雪そ袖にまはる
 やみならはおひてかへらむ時のまにくれぬ山らの花の一多た
 浪のうへも春はかすみのうちなればさくらかひをそまづはよせける
 さの国や吹上のはまの浜風も春はのとけくなりぬへら也
 かへる鴈なれつる空の雲霞立わかれなほこひしからしや
 きの小まてかほりし花に雨すて今朝はあらしの玉ゆらの色
 つしやくこけのかよひち春ふかみ日かけを分ていつる山人
 花らりて後さへ物と思ふかないまいくかは春のあけはの
 たちかへる春の別のけふことばうらみてのみも年をふる哉

夏

ほとみなくその月日のめくりあひて又たまたまるしとかさね哉
 友まうしかきねの雪の色ながら夏とは人につくるうのはな
 とりあへすくる日数のほとみなくかへし小田にぞなへうふ也
 きなくなるしゆみかその郭公心の松の色なやらん
 すみはや岩もろし水手にくみて夏夏そけなる松の本の本
 とまひさし煙はたえてほとすみぬ雲と浪との五月雨の空
 この比はしつかふせ屋のかきならひすしくさけるゆふかはの花
 ならの葉のそよく一本の下風にちきりてつとふ村の里人
 月まつといはてそたれもなめつるねやにはうとき夏のよの壁
 はかなくも命にかくるおもひ哉とはかり見まし夏虫の身を
 夏の夜はうき暁の雲もなし心のそに月のはのこりて

たつた山一葉落ちる夏かけも思そめてし色はみえけり
ちかしとも秋のけしきのみゆるぎみたるはなる山のほはし
はちさくあたりの風もかほりあひて心の水をすますいけかな
なにとなくおしめて過る月日にも物めはれなる夏の暮かな

秋

をのれのみくたけておつる岩浪も秋吹風にこまかほる也
みちしやはかなき末の露までもいかに結へる秋にかあるらん
長月の朧明の月のあなたまて心はよくる星あひの空
へたつらんいくへ雲のほかにして秋風ふくと鷹の聞らん
しら露のおくてのいな葉うちさはさびさしく秋の風になるへき
鹿のこま嵐のかせもおしなへて秋のめはれは山ちかきいほ
野へはいま秋の下露ぬきみたり風に色つく秋の夕ぐれ
須磨のうらの秋吹風にたれすみてもしはたれけん跡はかなしも
すてつともいとふにやよはるへき秋よりのちの月のこのよは
雲霧たちてこの葉は下に色つそぬよわたる月の末をかそへて
ニたひとあひみんよそをたのむかないへはかなしき秋のよの月
散にけりまかきの秋の葉のみみて露より上に月をのこれる
はしめなき月のゆくへに身をかへてさらは心のほてをくらはや
かるかやのほかなき露路のさばかりも秋といへは袖にこほれぬ
松風のひくきにたくふから衣うちたてたわねこそなかるれ
はしたかならずかり度にはくれて草のまくらも花の色く
雲相うつむおはなかくしたのかれまより色めつらしき花のむさき
物おもはてせかる袖もなかりけりこそまのほかの秋の色かな
みわたせばよもの梢にもみちして秋をかきりの山下の風
契つしほるなみだもかはかりそ空にすきめる秋の別に

二八二三

二八二四

二八二五

二八二六

二八二七

二八二八

二八二九

二八三〇

二八三一

二八三二

二八三三

二八三四

二八三五

二八三六

二八三七

二八三八

二八三九

二八四〇

二八四一

二八四二

二八四三

二八四四

二八四五

二八四六

冬

はれくもる空は時雨の心かはまかふ木の葉もおなし木枯
つてにたに人のとへかし神な月もみちにとつるさとのとさしを
夢をたにまたむすはすよさく祝ふしもさためぬ時雨散に
さすすなくかた野へ原に雪散てとたもしらすある今日哉
をしめるこほりのひまに風さえて心のそこそまつはくたくる
のこりなく暮ぬるとしの色かはにひと葉くらぬ冬の山かな
後の世の心もしろ網代もりさえたる空の月のよなく
すかはらやふしみのみやの跡よりていくらの冬の雪つもるらん
みなというのあしまのこほり今朝とてさはりさはらす舟も
かよはす
風さやくぬなのさへ原雪ふりてみちこそたえめをとたえぬる
またふかきあり明の空もそらまりて雪にまなまき遠近の寒
うきわするかもものうけにふる雪をかさなる年の数にみる哉
ついつつのあつたのたひとけぬまにほとなくくらゐ冬のかけ哉
みな人の春をむかふは心こそ年のくれぬるけしき成けれ
日もくれぬことは今日をかきりにてあはれ哉よしもぬ物ゆへ
悲
おほかたにきさてやまむ人しすたのむ契のそれもしらねは
物おもふ袖のよそめはしらくともさそとは誰か君につたへん
かたみかはたよそなからそれとみていてこしやとの軒の草はら
けふはまたありしうけにねをそなくうきたにそしよその面かけ
にはふ夜はさらに物こそかなしけれ梅さく春と人やたのめし
ことともなくてわかれし夜はの月さへあかね袖にとまりて
人しれぬ涙をこのみくつよりうきいてしまよふわか心哉

二八四七

二八四八

二八四九

二八五〇

二八五一

二八五二

二八五三

二八五四

二八五五

二八五六

二八五七

二八五八

二八五九

二八六〇

二八六一

二八六二

二八六三

二八六四

二八六五

二八六六

二八六七

二八六八

我はかりつらき契は又もあらし心のあたのむくひひとつに
ひさしくもあはてすくへき月日ははかててもしらすしうはいまはし
てにむすふほとたにあかぬ山の井のかげはなれゆく柳のしら玉
うつろはむ色をかきうにみむろ山時雨もしらぬ世をたのむ哉
らりつる枕もしらす袖くらてはらひなれたるよとこならねは
もろともに見しよの月をたことにて空に心の行をまつとも
ねにたへぬおもひにもえし秋の夜もまたかはかりの露はしらす
す多の松まつ夜はあけてかはるともこすてふ涙のたへし立すは

雑

あけにけりかさしていつる山かつら人もみるへきひかりはかりに
かきすふもしほの煙とたえしてあはれをのこすつらの夕風
つたかへてしける山らの村時雨たは行袖に色うつりけり
君にのみおもひはかこつ袖なれとはらひもあへぬ山の露かな
はまゆふやかさなる山のいくへともいさしら雲のそこの面影
つり舟や月にまはさすあま人とたのみてもこぬ旅のね聲に
行かへり波の上に年へぬるうきたる身とはかつらみつふ
ふかきよとてくたもとの露けさは草の枕の別なりけり
かり衣雷うちはらふよをかさねしはれにけりなうつる色く
しらさうしおのへの松にめをわけてすまつるさとのほととさる哉
おもひやる君か八牛代をみかさ山心のすまのしらへたかふな
もろしきやてるひのまへにとろほこのたつる心は神もみろらん
ふるき跡を見ゆつるかたのあまたあらはいづれの山にいほりしめま
し
心とて我物かはにたのめもつたのすみかの行急やはしる
としとて心の要にかくれともあはれへたつるみねの雲哉

二八六九

二八七〇

二八七一

二八七二

二八七三

二八七四

二八七五

二八七六

二八七七

二八七八

二八七九

二八八〇

二八八一

二八八二

二八八三

二八八四

二八八五

二八八六

二八八七

二八八八

二八八九

二八九〇

二八九一

翌日更書出一句百句 五時詠之

第一 第二 第三

第四 第五 追述

春四

はるくれはいと光をそふるかな雲井の庭も星のやとりも
我やとにけふのねのひの松うへて風まらつけむ末の松陰
さても猶たつねてとんかすみ五みやこのたつみ山の遠かた
とひこかしひとよふたよのへたてかは鴛鴦ぬる宿のくれ竹
いくとせをつめともさうにかはらぬはみかきか原のわかななりけり
雪きえぬ木のまの日影うつすけれと中く花とまつみゆる哉
吹まよふ梅のにはひに袖しめておられぬ水もけふはわかれす
こきまするにしきとれとや青柳のはなだのいとまつは染らん
さもあらぬ草葉も春はみなれけりやはらひあざる山の大よりに
うつりあへぬ時雨にたにも袖ぬらすみ山のさとにけふは春雨
さくら花心にららぬ色なからいくたひ春をうらみきぬらん
あれにけるさはへの駒のけしき哉春のあざとのめくむ古郷
かきつらねこし玉つさのかへるかり我ものからに誰しのふらん
これまでも心くはわかれけりなほしら水ものをのかききく
たのめをさし人松風のさ夜すみておもひにかよふよふ鳥哉
もろの花なかるも色をしるへとて浪にしかかふ春のさかつき
たのむかなさける藤なみ春をへて南のさしの日影てらさ
思とて春のかたみにすみれつむ野原のまとな雨をそほふる
いつしかも都の人にとつてんあての山吹今をさかりと
おもふことたれにのこしてなめをかん心にあまる春のあけほの
きらずなかくたのうま葉やとかうて霞になる春の夕くれ

二八九二

二八九三

二八九四

二八九五

二八九六

二八九七

二八九八

二八九九

二九〇〇

二九〇一

二九〇二

二九〇三

二九〇四

二九〇五

二九〇六

二九〇七

二九〇八

二九〇九

二九一〇

二九一一

二九一二

すみわひてあかひはりのしるき哉又かけもなき春の若年
おもたかやした案にましましかきつはた花ふみ分てあきる自露
こよひねてしほもなれんときは山岩つしきく峯の通路
いくたひか我君が代にあらためんかけものときき玉橋かな
さほひめの心の色にみゆる我花もかすみも春の山さ
あしひきの山なしの花ちりしきて身をかくすへき道たえぬる
としをへてなれけん宮のつはくらめうしやみだてて後しく春
みくりふ小汀のまこもうちそよまかはつ鳴世雨のくれかた
鳥は雲花はしたかふ色つきて風さへいぬる春の景かた

夏廿

夏衣たつはかすみめ閑なれや春の色をもへたてつるかな
山里は卯の花がさね雪折てすくふくいはそあをば成ける
雲の上のちよのみかけにあふひ葎神のめくみをかけて待我
し水せくもりの木陰に日は暮ぬ山ほときす此せすくすな
けふといへはよもきのわか葉かうそへて宮もわら屋もあやめふく也
さなへとるたこのをかきのさほく哉うちる雨やふりまざるらん
あくかれぬ花たはななのにはひゆへ月にもあうめうたゝねの空
雲せてみかきこえ行五月雨になめはたえぬ人も通はす
うたかひし心の秋の風たはははたととひかふ空につけこせ
あつま底のせせるとさしも夏のよは明をたゞくくひな成けり
ともしする葉山しけ山露かかしみたれやしぬるしのふもちすり
山さとはせみのものゝ多秋かけてそものさうの下葉露也
なめかやるふものといはのかやうひの煙もすしおろす山かせ
うつりかの身にしむはかり契とて扇の風を行きたつねは
あたにくと露さへ玉とみかゝれてうへしかひあると夏の花

二九二三
二九二四
二九二五
二九二六
二九二七
二九二八
二九二九
二九三〇
二九三一
二九三二
二九三三
二九三四
二九三五
二九三六

あらさぬのしはれて後にくく花のたゞ一様は秋の風まで
月さゆる池のはすに玉こえてこの世なからの光をそます
夏衣から秋かせたらぬひむろ山をこには木をのこすと思へは
またれす秋のはつ風いくともむすふいつみにみな小をれて
またさよりあさのた枝に秋かけて秋すしき夏はうへ哉

秋廿

秋きぬと露と梢にもらすらん風よりさきに袖のしほる
さもあらはあれ七つめにみはや年に一夜も秋の初風
色にいてん心もしらす秋の露に露とく宮木野と原
くらなしのいはて物おもふ秋のよはをみなへしにや色とかこたん
みな人の心にしのふ秋の野をほにいてゝなひく花薄かな
かるわのしけみわけこしふるさはあはてないなん心みえなは
吹まよふ秋のうは風むすほれ秋にとらつるくれの雲哉
ぬきとさしかたみもしらすふらはかま嵐の風の色にまかせて
秋かせにたへぬ葉葉はうらかれてうつらなく世をの篠原
この葉よく風の心になひきつて枕にかはる日くらしのこえ
秋の田のほかに露の色わきてまたさかなしき夕つくよ哉
今はとてしきもななり秋のよの思ひのそこの露はのこりて
まくすはふく田のおくの秋風にやめて色つく袖の上哉
しのはれぬ花のものゝ涙かなおのへのしかのさきしより
しのめわかれの露を契をきてかたみとくめぬあさかほの花
初かりのこえきそむるこの比の空ならはするあき露の色
今衣たれ野へのしら露まつ分て下葉に月の影たふらん
み山ちやみねにもおにも霧こめて待人もなし閑人もなし
もしはやくあまのとき度にな秋けて衣うつせすまの明はの

二九三七
二九三八
二九三九
二九四〇
二九四一
二九四二
二九四三
二九四四
二九四五
二九四六
二九四七
二九四八
二九四九
二九五〇
二九五五
二九五二
二九五三
二九五四
二九五五
二九五六
二九五七
二九五八
二九五九
二九六〇

みかさ山雲井をいつる影をへてけふひきわくるもち月の駒
 秋の月千世を一夜になかむともさてもやあくる空とくしまむ
 夜をかきねはたを虫のいそぐ哉單のたもとに露やきゆらん
 わかれなむ行急やいかにきりくす秋はねさめの友とたのみて
 とり辺山ふりゆく跡をあはれとや野へのすむし露に鳴らん
 たつた山すその嶺露ふけはやかてみたる松むしのこゑ
 いなつまも光もいまはよはりけりたのものの風のこゑははらて
 うらそく秋のむらさめひやかにて風にさきたつしたの落雲
 花を思ふ心もつきぬしら菊のまた霜とかぬ色をみしより
 年をへてよしなき秋のくれにみてしみる色のうらめしき哉
 あらためて又さらにやはおしむへさうらみなれたる秋の別を

冬廿

神な月おなし木の葉のちるをとむふしも名残無心ちして
 時のまにしくる空の雲過了又誰かさとに袖ぬらすらん
 夜をへては野への草葉にとく霜のきゆれば色のかれまさる哉
 嵐だにかことかましき山へに霰ふるせみねのしおしは
 ふりをめてした葉おもしろし松か枝と稍もたえすつもろしら雪
 しはれあしのほすまの色に秋過了雪をとまると遠近の片岸
 灰さそふ鳥なくせひれがうし松浦の山の跡のしはかせ
 つたひこしかけひのし水つらゝめて袖にそいつる冬のよの月
 したの思うは老の水くなくし浮ねのかもの衣にに鳴声
 いかゝする枕も床もこほりにて月もうあかすせゝのあしろ木
 あしたつのごきも雲居にきこゆ世玉のうてなは霜ふかくして
 ふかき夜におとめのすかた風とちて雲うにみてる万代のこゑ
 ちる雪にみことはすみておとめこの袖の色ますもしきの度

二九六一
 二九六二
 二九六三
 二九六四
 二九六五
 二九六六
 二九六七
 二九六八
 二九六九
 二九七〇
 二九七一

詠四十七首和詩

まゝす立ゆくてに人のしほろ哉かりはのとちの栗の立枝と
 いく千代とかきりもしらぬ雲の上にはるかにすめる朝くらゐのこゑ
 すみかまの煙の下につむ物は寒きをねかふ歎なりける
 としられてはとけのみなを聞時はつもれるつみものこゝろあらしな
 うらにはふふせこのしたのうつみ火に春の心やまつかふらん
 門ごとに千代の春とやいはふらん松さるしつのとのかさまぐ
 春秋やことそともなきすすひばてささいたつらにつもる年哉
 建久二年六月つきあがりし夜ふくるほとに
 大將殿よりいろはの四十七首をつかはして御
 使につけてたてまつるへきよし侍しかはわか
 て書付侍し

権少將

春十首

いつしかもかすめる空のけしきかなたゝ夜のほとちの春の曙
 ろふのうへの秋のこそみは月のほとち春は千さとの日くらしの空
 はるはきてたにの氷はまたとけすさはおもひわく鳥のねも哉
 にほひきぬ又この屋との梅の花人あくからす春の明くれ
 ほの／＼とかすめる山のみねつゝおなじきすのこゑをうつらむる
 へて見はやだきのしらいと岩こえて花ちりまはる春の山里
 ときはなれみどりの松の一しほにははね花の匂なりけり
 ちりまかふ花に山路はうつもれぬたれかきわけて今朝をとふらん
 りうもんのたきにふりこし雪ばかり雨にまかひてちる林哉
 ぬきかへむあすの衣の色もおしいたくなれし花のにはひに

夏十首

二九七二
 二九七三
 二九七四
 二九七五
 二九七六
 二九七七
 二九七八
 二九七九
 二九八〇
 二九八一
 二九八二
 二九八三
 二九八四

二九八五
 二九八六
 二九八七
 二九八八
 二九八九
 二九九〇
 二九九一
 二九九二
 二九九三
 二九九四
 二九九五
 二九九六
 二九九七
 二九九八
 二九九九
 三〇〇〇
 三〇〇一

るりの地に夏の色をはかへてけり山のみとてうつす池水
をの山やまた冬こもる雪とみてうの花わくる谷のはを道
わすれぬこそふるこそ悲しめて絶めつらしき郭公哉
かさしてもたのみをかくるあふひ草てる日のかけにいづく世ならん
よせかへる浪のひききに秋かけて夏はかよはぬいその松かせ
たのむかなはちすの露に哭をきてきえん後の玉の行をど
れいよりもこよひすしき嵐秋まつかけの山の井の水
そてからせみののは衣なれく秋の初風たらわかれなほ
つもりける夏の日はすといとひつとおもへはとしのなかに過ぬる
ねぬにのみあけし夜ころのはかなきもたけふはつる六月のくれ

秋十首

なにとなくものそがなしき秋風のやとかりをむる庭の萩原
らいにをかむた秋はきの一枚もほとけのたわはむすふとそきく
むらさきの露にははる花よりも色むつまじきをみなへし哉
うつらなくまくすか原の露分て袖にくたくる秋の夕くれ
みな山のやまのしつとも色つきて時雨もまたすくくる秋かな
のちに又たれかきてみん谷川やむすしつに紅葉たる山
おりことにあはれもよほす鐘哉秋のすき葉の菊の白露
くれにけりおしむかひなくゆく秋にまたみぬほとと長月の月
やきにやく秋の入あひのこすきさくれなめをふる山嵐
または見し秋をかきりのたつた山紅葉のうへに時雨ふる比

冬十首

けふりさへめにたつつけさのすまひ哉相あらはにほろい山里
ふゆきぬとつけの枕のしたさえてまつ霜にほろうたねの袖
この山またこのころのいかならむなへてのみにをしく初雪

三〇〇二
三〇〇三
三〇〇四
三〇〇五
三〇〇六
三〇〇七
三〇〇八
三〇〇九
三〇一〇
三〇一一
三〇一二
三〇一三
三〇一四
三〇一五
三〇一六
三〇一七
三〇一八
三〇一九
三〇二〇
三〇二一
三〇二二
三〇二三
三〇二四

えのみなみわが葉の草もみとりて春のかけなる神無月哉
てらくにおなしくひく鐘のをにとこしも冬のまつきこゆらん
あとなえておらし木の葉に雪ふりぬたればかりはとまつ人もなし
さは川のせいのいはなみふみしたき氷にわふるや夜半鳥哉
きす鳴かりの雪に旅ねせむうたのふし柴しはしやとかせ
雪おもる松のひきを反として山も冬もふかきやとかな
めくりあふはとなきけふはあまたへぬきていくとせをむかふへ身
そ

忠七首

みつくきのはかなきことをしるへにてけふせきかゆる袖のしからみ
きたへの枕のしたにみなきりてやかてもくたすみな川哉
えにかけり鳥ともさうにみなれしなほをならふる契なけれは
ひさしくも成にけるかなかりそめに契しまゝの世のはかなきは
もろともにしほる涙の色なれてたれかどくる袖はくださん
せめておもふいまたひのあふことはわたらむ川や契なるへき
すてやらす猶たかへる心まておもへはつらきよの契を
この歌と中侍従みてやかてかきつけてつかは
したりし返しに又

春十首

いくかへり山も霞てとしふらん春たつけさのみよしの原
ろくやおんてらす朝日に雪消て春の光もまつや道いく
はつねなけいまは鶯谷の戸をとらる雪のふるすなりとも
にこり江におふるまこもをあさるとてかけにもこまのはなれぬるか
な
はしの影のにくにめくるもおしまれて明なんとする春のよの空

三〇二五
三〇二六
三〇二七
三〇二八
三〇二九
三〇三〇
三〇三一
三〇三二
三〇三三
三〇三四
三〇三五
三〇三六
三〇三七
三〇三八
三〇三九
三〇四〇
三〇四一
三〇四二
三〇四三

へうもいとたえたるみすのひまもみな花にうつめる古郷の春
鳥のねも花のかはりも春なからなめはれせぬよきふの宿
ちきとねと人のまたるゝタかな猶花のこるけふのたのみに

りちのうたにこのねあへるタまくれかいたとむひく庭の青柳
ぬみ水のあたりにもほふかきつはたけふのみ春とみてや帰らん

夏十首

るてんするみつのさかひににたるかなおしみし春も別ぬるかな
をうたえてみたるゝ玉と見ゆる哉雨のなごりの卯花の露路

われのみやきこてかたらむ郭公また里なれぬ暮のこころ
かりそめのつまとはみれとあやめ草軒の匂にいくせなるらん

よきてふけ花桶の下かせに匂ひも色もさそふ涙を
たつねつる山井のし水岩こえてむすはぬ袖に秋風を吹

れいのこゑかねのひききも秋ちかしほりもきも山ふかくして
そめぬより時雨まつらし大井河あらしの山の夏の木の木

つりふねにはかなくあがす旅人のうきねすしき夏のみしか夜
ねにかへる花をうらみし春よりもかたみとまらぬ夏のくれかな

秋十首

なみちより秋や立らんすまの閑あざけの空にかはらうら風
らのへうしひもの玉ゆらとき風はあまのかはらふ雲やまくらん

むすふ露おきふす風の色こと心にみたるゝ真野と秋原
うき雲の色さへかはる月影の袖に露をく秋はきにけり

わつよりなれこしかみのなかせと夜とひとりかきやる秋の天枕
のこりなくちりなん後のいかならん下葉をつく秋のしら露路

おしみわひ心もつきぬ夜をかさね月かたふけは秋もとまらず
くりかへししく秋風にたくふらんまささのかつら色かはりつゝ

三〇四四

三〇四五

三〇四六

三〇四七

三〇四八

三〇四九

三〇五〇

三〇五一

三〇五二

三〇五三

三〇五四

三〇五五

三〇五六

三〇五七

三〇五八

三〇五九

三〇六〇

三〇六一

三〇六二

三〇六三

三〇六四

三〇六五

三〇六六

三〇六七

三〇六八

三〇六九

三〇七〇

三〇七一

三〇七二

三〇七三

春五首

やみそうま秋をかきりとなかめても月にわがらゝかたみなりせは
まつ風はたくふこの葉もなき物を秋のこころぬきしゆらん

けたすともはかなむける露路をさへ秋のかたみははらふからし
ふかき夜のならの葉わけにつたひきて時雨にかへる夢の通路

このうちのおもひも冬やまさるゝむ霜にまよへる鶴のもろこゑ
えこそみねうらふすはとの夢をたにあられにわふる雉の下かせ

てふのおし花はさながら霜かれてにほひそのこる菊のまかに
あしかもさばく入江につらゝおてかせなる霜のいくへさゆらん

さしかへる宇治の川おさ袖ぬれてしづくのほかにほらふ自雪
さのふけふとはとへかし雲さえて雪ちりそむる春の松かせ

ゆるの戸のしはかせはけしふなわたり冬をはすくせ後もあひみん
めくみつゝ雪にひらくる梅かえの下の匂ひに春そかよへる

悲七首
みちのくのしふもちすりみたれつ色にを恋んおもひそめてき
したにのみぞはさらばやましろのみのまこかりねなりとも

あろくしのさしてもなれぬ名こりゆへとよのあかりのかけそこひ
しき

ひきすつてわがてなれこしあつてちかへりて人をこひむとや見し
もりぬへし涙せきあへぬ床のうへにたえす物思人のなけきは

せとはやみ居る浪のよとらに玉ちるはかりくたけてそふる
すきとゆく月目もつらし人しれたのめしまの甲の契は

いろはの哥のうちにこれも御使をたてなからとりあへざり
しいたつらことにや

三〇八一

三〇八二

三〇八三

三〇八四

三〇八五

雷のうらに春ときたりとしらすはみのしら衣梅の花が
春といへはつのくもあし(よ)の衣のほとをけしきにみするさはの春駒
あきみとり空に浪よるいとゆふにみたれてまか小窓の青柳
うへをきしこすまの梅の春風をおもふもしくもあつてくひす
いろにちる花にうらみをつくさせてつれなくよそに過ぬるやよい

夏五首

いとほるゝなをやたつへき年とへて春とへたつるひとへの衣
たれも世にいたのおもひはやすからしめてもかくすもゆる夏虫
また人のことふやとの離かはよし跡たねしける下草
すたさけむ人こそしらねふる里のむかしはいまにさけるなてし
なれきつるあふきの風もいかならん夕へのきこえはつるせみ

秋五首

秋よた心のはかのおもひかな秋のうは風みねになく虎
ふく風もとくし露もてる月も老にみかくすかのと秋
敘すとはまほし物と衣うつともほのかに露とむる里
秋の色のまなきにみてるすまひ武門田のなることまの紅葉
あさなきほかの紅葉の色も見しはし吹やめちらす木がらし

冬五首

さくら花おしみしくれもまたちかきおもかなから時雨する冬
すみせしならのひろ葉をけさもかな日影ふせけん雪つもるやと
ときしもあれさびしき池の汀我あしのかれ葉に友とふる翌鳥
むらさきも獨ぐらはつる色かへて三たびうつろふ霜かれの菊
もろ人のなやらふとに衣はふけてはけし風は暮はつる年

建久七年秋こういたはること侍てこもりぬたる夕つかた大将敷
よりこの哥をかみにきてたしいまと侍しかは便につけてよい

三〇八六

三〇八七

三〇八八

三〇八九

三〇九〇

三〇九一

三〇九二

三〇九三

三〇九四

三〇九五

三〇九六

三〇九七

三〇九八

三〇九九

三〇一〇

三〇一一

三〇一二

三〇一三

三〇一四

三〇一五

らせいまみれは昇にてもなかりけり

あけかたになるや秋風立そめていさゝかすし夏の牛枕
きりの葉のうらぶく風の夕まくれそらや身だしむ秋はきけり
はらすき池の夕かせ夏はあれとよし一花の秋のなてしこ
なにはかたけり江は月にゆつりをきてあしのほすまにうつる白波
おる人はいさしらすけのまのゝ萩わかたぬるゝ露のにしきか
春もみすうつもかなしとしか鴻み山へつらき有明のそら
ふたり見し空行月のわたるかなとおもへばおなじ秋の衣て
またはこし露はらふ風は篠分てひとりのあつたのゝ八月長月
くりかへししつのをたまきおふともかへらぬ月を此の月
れんよする雲のはしの秋の月心たかくもすみのほるかな
こす涙もくだくる玉もこほるめりやそら川のはしの月影
そま河の秋のよそなる色もみなあらぬ雪にはかほる更すか
たのまろし人いかにかりつらからむあとなき秋の古郷の露
竹をひて舞さしよする川むかひ露のみ秋の明けのゝ色
長月の霜とえゆくむさしのゝゆかりに遠き草のものと我
らむせいの花のにしきの面影にいはいりかなし秋の村雨
ねぬ衣のみかさなる雲の古郷に涙とふら一秋のかかりかね
おらつるも木葉はらぬ紅はさびしかりなましき色とおもへと
きまさすはよひの秋風しはしめてつれなき人涙かこたん
のこりゆく命にそへてかなしきはとれし月にむかふ秋風
うすくこき紅葉をやとにこきませてをのれとまらぬ山あうの風
はるのねやとてしこけは色ふりて秋の枕にうかふ月かけ
かへりこむ日かそふるあふらふもいまはすまなる日くらしの声
せきとめてしほしも見はや紅葉る秋をそひておつる山水

三〇一六

三〇一七

三〇一八

三〇一九

三〇二〇

三〇二一

三〇二二

三〇二三

三〇二四

三〇二五

三〇二六

三〇二七

三〇二八

三〇二九

はけしきはこの比よりもたつた山松の嵐に紅葉みだれて

まじのまじしけみさえたの露分て煙をかたみのそか菊の花

野へのはかよもの草葉はおとろへて官舌の夢をむすふはつ霜相

しらはやな暮れゆくはてをなかめてわか世になれん秋の契大を

たきすむもしほの煙ほのくとなひきみなひかす秋の夕暮

つりふねのうかふなみちに月^{つぎ}花て人と秋とのわかれを思ふ

ゆきかへるはてはわが身のとし月を涙も秋もけふはとまらず

建久三年九月十三夜五太符殿にまじりたりしかはにはかに

人くめしにつかはしていまこんといひしはかりにといふ哥

をかみにまきてよませられしにこれらはかきとむる物にも

あらねと筆をたにそめあへぬみだれかはしきもなかくや

うかはりてやとて

いかならん外山の原に秋くれて嵐にほろろ岑の月影

またきより暮行秋のおしけれはいつるもつらき長月の月

こまよはるむしの鳴ねの友かほに風もすくなきならの葉かしは

むすひける契大もつこき秋のうのすま葉の霜のあり明か影

としのうちはよしした秋のなから南心もたえず人もうらめし

いくかへりもみくらぬらんはこそ原よりく木葉秋をかきねて

ひきかふる冬のけしきのさびしさをまたきにみする秋の山ざと

しるしらすやとわかるへき今夜かは秋風すてふ度^はの月かけ

はきの花はかなき末の露路の色月のなさは猶をかれけり

かりかねのはるかななる一こまも物おもふ袖の露をうけとる

りうたんの花の色こそさきむれなへての秋はあやとよのそま

にしの空いかなる閑とさくこめて月と秋との影をとめん

なにことをおもふともしらぬ涙秋のねむめのあかつきの床

三三〇

三三一

三三二

三三三

三三四

三三五

三三六

かわてより思ひ色にすぎにけり嵐の山の秋のくれかた

つり舟のはるかにいつる浪風にけり江かなしきあきのくれかな

木はおらぬ草葉ふれぬなをかは山にも野にも人のなめん

のこりなく消ぬる雲の夜もすから又たなひかぬ秋のよの月

あたら夜とおもふばかりにやとはいてぬ心のほては月の行ふに

りんをしてたましくくる人の世に猶秋のよの月をすくなく

あまた見し秋にもさらにおもほえずかはかりする月の面かけ

けふたつをらのしの屋のくに本原そのふしもなく秋そかなしき

のきにおふるしの木の末の露^やまでも秋にしほろろふるさとの空

つきはつる秋のおもひにひきあひて枕にむき鐘の声哉

きてとはぬ人のあたりをさはみはやひとりわがむ里の秋かぜ

をのれのみ秋をよそにみむろ山岩むす苔に時雨ふれとも

ま野と浦のいり江の浪に秋暮てあはれさひき嵐の音哉

ちる木の葉かざる霜に跡もなし山路のおくの秋の通路

いまさらにもそよふ秋の日かすかはことほりもなきものうらみ哉

てりかける紅葉をみねの光にたまつ月はそき有明のやま

つまこふる鹿の心もいかならんをのかこさへかはるあきかせ

るりの水にさのはやし色くに心うさたつあきの山川

から国のむかしの人もたえさきし秋のあはれをたれかしのはん

なへてにそみなことの葉はなりぬへき玉みぬ月の秋の光を

いろはもしくせりのおなしころのことによいづれもと

の御哥にかむとすれは色くもいとありかたなくや

十五首哥

木

国とめる民のかまとの煙にも外山の木々のもととしらるゝ

三二五〇

三二五一

三二五二

三二五三

三二五四

三二五五

三二五六

三二五七

三二五八

三二五九

三二六〇

三二六一

三二六二

三二六三

三二六四

三二六五

三二六六

三二六七

三二六八

三二六九

三二七〇

火

かき枝の道にさまたつ松の火の光をくる契けかりや

三一七二

土

わきめめしはしめしらすあかねの土よりなれるよもの海山

三一七二

金

霜さそ月かけしるも風のうちにをのか秋なるかねのと哉

三一七三

水

行なき山の一つの露ばかりなるも水のすゑのしらなみ

三一七四

東

あま白きすきの青柳うちなひき春くる方はまつしるまかな

三一七五

西

宮こよりたつねいくのし花薄ほのかにてらすみか月のそら

三一七六

南

堂たてし岸のかひある藤渡のなひきてともたのみやち哉

三一七七

北

ひかけみぬとまたの軒の陰の雪山のこしちは空にしられぬ

三一七八

中

秋のよの影かたふかぬもそ月のとよりは空のものがなりけり

三一七九

青

かは竹の葉この色にまかふかな玉のすたれにかくるあふひは

三一八〇

垂

板かはす沢の秋冬はなちりてこかねの露に涙をこえける

三一八一

赤

時雨つる雲も日影にそめられて紅葉をらすす葉の小枝

三一八二

白

白雲のやへたつ峯の山さくら空にもつくし神津かは風

三一八三

黒

鳥羽玉のやみのうつしにかきやれとなれてかひなき床のくらかみ

三一八四

大持殿にて秋ころよめの僧の経をむきこてれいのこのもしと

かみにとて

秋の哥

なつすきぬとおもふはかりのあさけよりやかてみたるし袖の露哉

三一八五

もとめても秋よりほかのやともかなことともなき袖やかはくと

三一八六

めくみねとみればくれにし春の草風にとおとく秋はきにけり

三一八七

うみ山もしらぬわかれの袖の上にこすをまやかて秋の夕暮

三一八八

はのかなる露よりとらの秋風やおもふ行きの竹の一村

三一八九

うつととを過ゆく宿をくらきて秋の衣の風したふらん

三一九〇

歴山のすそ野に小田の秋風やなひきし人のほしめなるらん

三一九一

むかしとは夢にのみこそあひみしかたそそのまの袖の月かけ

三一九二

くれにけり又この秋の花薄ほのめく露に霜結ふまで

三一九三

ゑしのたぐ煙けかりはさもあらはあれ雲井の月の秋風の空

三一九四

きくさきてこの葉もおちぬこれを此ことしもおちし秋のつれなき

三一九五

やすらはてねなよし月にわかれなれて心づからの露の明けの

三一九六

うく紅葉玉をるせの色をめてとなせの池に秋もとらす

三一九七

或上人文集の詩と題にてよまむと思ふ一事あらけり名むすへ

三一九八

よしすめめ甲されしかは老のちのいたつることかきつけてつ

三一九九

かはー

春十五首

今日不知誰計会 春風春水一時来

三二〇〇

氷とくもとの心やかよふらん風にまかするけるの山水

三二〇一

春風花中梅 （花）

櫻杏桃李次第開

ささぬ世よのまの風はさをはれて梅よりにはふ春の花園

白片春梅浮湖水

白妙の梅よく山の谷風や雪けにさぬせのしからみ

舊雨新知出城端

このさとのむかひの村のかきねよう夕日をそむる玉のと柳

春來無伴閑遊少

おもふとらむれこし春もむかしにて旅ねの山に花やちらむ

閑翁誘引采花下

衣てにみたれておつる花のえやさをはれさつる鶯のこゑ

逐処花旨好 隨年良自衰

やとことばに花のとこほにはへとも年ふる人を昔にもにぬ

還見人家花侵入

はるかなる花のあるしのやととへはゆかりむしろぬのへのわか草

花下忘歸田裏景

時しもあれこし路といそく鷹かねの心しられぬ花の本枝

落花不語空斜街

山吹の色よりほかにくく花もいはてふりしく庭のこのもと

花落城中地 春深江上天

春の空入江の浪にうつる色みやこもふく花やちららん

舊雨新知深花月

そむけつるまとの露ふかき花のかすみにいづる二月の月

歲時春日少

いたつらに春日すくなき一年のたかいつはりにくるゝすかのね

留春春不留 春婦人寂寞

うらむとてものと日かすのかきりあはれは人もしつかに花もとまらず 三二一

歌風不定 風起花蕭索

春のゆく梢の花に風たらいづれの空とまよりともなし 三二二

夏十首

微風吹杖衣 不寒復不熱

たちかふるわが衣てのうすければ春より夏のかせをすしき 三二一

新葉陰深多

陰しけきならの葉かしは日にそへてまより西の空を少き 三二二

塵橋子低山雨重

むらさめに花たらはなやおもるらんにはひをおつる山のしづくに 三二五

池畔蓮芽謝

風わたる池のはらすの夕月よ人にそあたるかけも匂ひも 三二六

風生竹衣窓閑臥

風さやく竹のよなかにふしなれて夏にしられぬ窓の月哉 （かり） 三二七

青苔地上消殘雨

夕立のなごりの露と来すてい苔のみとりにくるゝ山かな 三二八

不是禪房無熱到

嵐山すきの葉かけのいほりとて夏やはしらぬ心こそすめ 三二九

暑月會家何所有

吹をくらよとの北風秋かけて君かみけしの身にやしめと 三三〇

蕭索風雨天

空蟬の夕のこゑはそめかへつまた青葉なる木の下陰 三三一

夏臥北窓風

やとからにせみの羽衣秋やたつ風のた枕月のさ庭 三三二

秋十五首

夜來風雨後 秋氣驟然新

よるの雨のこゑ吹のこす松風に朝けの袖は昨日にもにす

【國尉先鋒手】

はしたを予ならず此の風たらて秋の扇を遠きかり行

太底四時に悠苦 社中斷腸是秋天

さくら花山郭公雪はあれとおもひをかきける秋はきけり

八月九月正長夜

長月をまつよりなから秋の夜あくるもしらすやうつこゑ

相見夕上松台立

夕くれは物おもひよさる暮身をかへてなくうつせみのこゑ

遅々鐘漏初長夜

鳥のねをとしもはかり待し夜の鳴てもなから暁の空

残影燈閣端 斜光月窗牖

わかしたふ人はひこすまことしに月さしいうて秋風を吹

華亭園頭秋月晚

たれもさや心の色のかほらむとかのあざらに夕日すころ

月陰雲外 螢飛廊宇間

しくれ行雲のこすさの山のはに夕たのむる月もとよりす

破日暮山岳蒼々 浸天秋水白茫茫

山をこそ露し時雨もまた染ね空の色ある秋の水哉

寒鴻飛を覚秋盡 鴈鳴鳴遠和衣永

まきのやにとなり霜は白妙のゆふつけあをいつかきくへき

老菊衰蘭雨三蕭

ふらはかま嵐のくたくむらさきに又しら菊の色かならん

不堪紅葉青草地 又是涼風暮雨天

三二二三

三二二四

三二二五

三二二六

三二二七

三二二八

三二二九

三二三〇

三二三一

三二三二

三二三三

三二三四

こけむしりもみらふさしく夕時雨心もたえぬ長月のくれ

葉落如雨 月色白似霜

こまはかりこの葉の雨は古柳のにはもまかきも月の初しも

万物秋霜能壞色

した草のしくれもそめぬかれ葉まで霜こそ秋の色はのこすね

又十首

十月江南天氣好 可憐冬景似春花

この里は冬をく霜のからければ草のわかれ葉を春の色なる

寒流帶月浸如蟻

山水にさゆく月のですかゝみこほらすともなかるとも見す

策々窓戸前 又聞新雪下

初雪のまとのくれ竹ふしなからおもるうれ葉の程さきこゆる

燈火寂消燈欲盡 夜長相對百憂生

晩は影よはう行燈になかきおもひを以とりきえせぬ

唯有教養菊 新聞雖落閑

さく花の今の霜にをさめてのころまかきの白菊のいろ

南窓几燈座 風霰晴粉々

嵐の上にはしの光はさえなからわごとふらぬあられをそきく

寂寥深村夜 殘雪雪中閑

さといとを園の村竹ふかき夜の雪の雲まをわたるかりかね

望春々未刻 応在海門東

清見かたあけなむとする年なみの閑戸の外に春や待らん

雪尽終南又欲春

いたつらに日教ふりつむ山の雪あかしくは春の曙

白頭花乳名経

三二三五

三二三六

三二三七

三二三八

三三三九

三三四〇

三三四一

三三四二

三三四三

三三四四

三三四五

三三四六

としふれはわかくろかみもしういとよるは仏の名となへつゝ

三二四七

志五音

誰為私床塵

あれはてぬはらほし袖のうき身のみあはれいく世の床のうら風

三二四八

夕殿堂雅忠情然 秋燈探今未眠賦

くるとあくともわのあたりももえつゝぬ夕のほたる夜はのとし火

三二四九

行宮見月傷心色

あやふふやとる涙の紅にものれもあらぬ月のいろかな

三二五〇

夜雨閑猿断腸声

悲てなくたかねの山の夜の雨おもひそまる暁の雨

三二五一

旧枕古家誰より為

とこの上に旧枕もくらはてゝかよは小亭を遠ざかり行

三二五二

山家五音

徒今便是家山月 試問清光知不知

しるや月やとしめをむるおいらくの秋山のはの影やいく夜と

三二五三

始知大造閑閑境 不為肥人富貴人

明くらす人のならびをよそにみて通る日のけいもいそぎやにする

三二五四

塵山雨夜草庵中

しつかなる山路の色の雨の夜に若老しき身のみふりつゝ

三二五五

人間栄耀図録浅 林下幽閑意味深

あらしくと田のものは尊しけりつゝ世のいとなみのほかや住うき

三二五六

山殊雲物冷

秋山の岩ほのまくらたつねでもゆるさぬ雲を旅心とする

三二五七

旧里五音行懷旧

前庭後院傷心中 只是春風秋月知

三二五八

おは空の月こそこのれすみなれし人の影みぬ軒の草ほに

三二五八

蒼苔露葉地 日暮殘風多

秋風はもみちを台に吹しけといかなる色と物そかなしき

三二五九

柳柳集高林

なをふりばさし柳の一枝や日影こたかき夕暮の色

三二六〇

閑日一思旧 旧遊如目前

おもかけはた目まのまへの夢なからかへらぬむかしあはれいくとせ

三二六一

唯將老年淚 一灑故人衣

人しの小老の涙の玉章をかたみとみれはいとふりつゝ

三二六二

閑居十首

但有雙松當砌下 更無一事到心中

わかやとの砌にたき松の風をれよりほかはうちもまきれす

三二六三

山林太寂實朝闕吾唯煩唯茲得閑内鄉真以靜得中間

あし引の山ろにはあらずつれくし我身世にふはなめする里

三二六四

偶得幽閑境遠志塵俗心始知真隱者不在山林

つま木もろやともなしにすみはつるをのか心を身とかへしける

三二六五

更無俗物當人眼 但有真声洗我心

世のうきものはなれておつる境のを心にのそこいませすみぬる

三二六六

尽日生涯似不離一字中々心本無繫累不出門同

あくからう心ひとつそさしこめまきのいたとのあけくろく空

三二六七

進不厭朝市 退不忘人景

さたらかきすみかをわきてしたはねとほるみちをいとふともなし

三二六八

深閑竹間扉靜松松下獨嘯晚風前何人知此意

ゆふまくれ竹の葉山にかくろへて獨やすらふ庭の松かせ

三二六九

賴愁環堵客 蘿窓爲巾帶

あらはれてうき世へたつる色やこれ山々に深き苔の状衣

三二六〇

心足即爲富身閑仍當貴富貴在何中何必居高位
なけかれすおもふ心にそむかれは富もわら屋もとのかまなく

三二六一

看雪身花散風月洛陽城裏年閑

人とはぬ月と花にめりてみやこともなし年々の空

三二六二

還懷十首

置心世事外無憂矣今無憂

心からつむも袖のよそなれはくたすはかりのものもおもはず

三二六三

欲留年少待富貴々々々来年少去

さりととも待しとはすきの戸につもれば人の月をふりゆく

三二六四

春云有来日我老無少時

鶯のふるすはぐらにがすめともうき老くの帰る日そなき

三二六五

我有一志君記取世間目取苦人多

いとまなきあまのつりなわうらはへてうきもしつみもあはれ世の中

三二六六

徒道人生都是夢々々中歎咲忍勝愁

おほかたのうき世になかき夢のうちに悲しき人をみてはたのまし

三二六七

生死尚復愁其餘安足道乎

たまきはるいのちをたにもしらぬ世にいふにもたえぬ身をはなけか

三二六八

身心一無動浩浩如虛舟

うら風や身を心にまかせつゆくかたやすきあまのつり舟

三二六九

委形老少外忘懷死生間

おもふしも人のとかめぬ床の上は長もしうす秋の夜の霜

三二七〇

我若未忘世雖開心思忙世若未忘我

雖退身難戚我今莫於是身世交相忘

三二七一

よの中もいとふ心も軒におふる草の葉ふかく霜やをくらん

三二八一

人生無幾何如寄天地間心有千載憂身無一日閑
したむせふ色やみとりの松風のひと日やすめ身をほりつ

三二八二

無常十首

親愛自零落存者仍別離

むごしの草葉の露もをきとす過る月日を長別路

三二八三

逝者不復廻存者難久留

かへらぬもとまりかたき世の中はみつゆく川におつる紅葉は

三二八四

往事昨花都似夢旧遊零落半歸泉

見しほみな夢のたづにまかひつむかしは遠く人のかへらす

三二八五

殊風滿袂淚泉下政人多

老るくのめはれ我よりしら露の消ゆく玉に涙おらつ

三二八六

原上新墳委一身賦中旧宅有何人

とりへ山むなしき跡はかすそひて見し古郷の人をまれなる

三二八七

生去死来都是幻々々衆衆難奈何憶

やく花もねをなくむしをしなへてうつせみの世にみゆめ幻

三二八八

早世身如風裏燈暮年製作鏡中朱

世中は木葉もたへぬ秋風になひさかたなるよひの燈

三二八九

幻世春來夢浮生水上泡

淡となるしからみもなき早瀬河うかみなわを消てかなしき

三二九〇

耳裏頻聞政人死眼前唯覺少年多

みとり子をありふるまの反と見てなれしほうとき夕暮の空

三二九一

古塵何代人

つかふりてそのよもらぬ春の草ぐらぬ別と誰したひけん

三二九二

法門五首

遠種當時事何殊昨夜中自然空に法を緣成一空

おは空のむなしき法を心にて月に棚引雲ものこらす

迴念卷私願々此現存身但受過玉報不待將來回

つらき身のものむくひはいかゞせんこの世の後の學はむすはし

誓以智恵水 永流煩惱塵

さとりゆく心の水にあはれてつもりてよものちりものころし

由來生老死三病長相隨除却無生忍人間無業治

舟のうちばうきよの岸をはなれてやしらぬ夢の名とは尋ねん

此身何足忘才劫煩惱根此身何足厭一聚塵空塵

おは空になつよほともありかはらうかへるちりとなにかはらはん

舟のことよそのうへに思なりて後これ人も見るまじきこと

とてたゞことさらのよし侍しかば又筆にまかせて

詠百首和詩 前八僧正御房四季題

四季神机

祈年祭

あらたまのとしをいのるとひくこまのあと久しき二月の空

神今食

みな月の月影しるきをみ衣うたふさ浪よるそすしき

例幣

みてくらのなつやいすの川浪に山の紅雲もぬさやたむくる

臨時祭

かざしこそくくらも藤もむかしにてみたらし川をおもひこそやれ

四季月

なれをめし雲の工こそ忘れねやよの月のふるまかたみに

玉川に月のしからみかけてけりいる影みせぬ卯花のころ

三二九三

三二九四

三二九五

三二九六

三二九七

三二九八

三二九九

三三〇〇

三三〇一

三三〇二

三三〇三

三三〇四

三三〇五

三三〇六

三三〇七

三三〇八

三三〇九

三三一〇

三三一一

三三一二

三三一三

三三一四

三三一五

三三一六

三三一七

三三一八

三三一九

三三二〇

三三二一

三三二二

人もみななす門あるへき世とそみるまた秋のよに月も漆めり

天河衣わたる月もこほらん霜にしもをくかきよのけし

風

梅の花には小春へと吹風にたかかきねとかあすも尋ん

か門しけみむすはぬさきの山の井に夏なき年と松風をふく

さことば人なすめそ秋の風こぬ衣うらみようき身なけんと

冬の木の霜もたまらず吹かせに星の光をまさうかほなる

雨

あさみとり露の玉のをぬきもあへす柳のいとに春雨をふる

水もなき小さをとつる夕立のなきつせうくちものと谷川

軒の雨のむなしきはしをうつたへにねられぬ衣はの秋をつれなき

さえくらす都は霜もましとぬに山のはしるき夕暮の雨

晩

里とをき八く玄の鳥の初声に花のかをくる春の山風

色はまたわかれぬ軒のあやめ草や月とななるあけ暮の空

たか里のいつらは秋の鐘のをとを月よりのちもなかくてをまく

旅人の行方とをくいてぬ也また夜はふかき雪のけしきと

朝

庭の雪もかつちる花もあたらしく松にまじるあさきよめ故

あかね衣の月のなこりのうたにねに衣てしうくあくる山のは

ななき夜に妻とふ歳ややすむらんあくれはいとけ風を吹

あさほらけよとこの霜のいささきも煙をいそく冬の山のかつ

夕

おもふには暮はなけといそけとも花におほめくたそかれの山

うらふさきねにゆく空の村からすをのかあはれは夏の夕くれ

三三二四

三三二五

三三二六

三三二七

三三二八

三三二九

三三三〇

三三三一

三三三二

三三三三

三三三四

三三三五

三三三六

三三三七

三三三八

三三三九

三三四〇

三三四一

三三四二

三三四三

三三四四

三三四五

三三五六

三三五七

三三五八

三三五九

三三六〇

三三六一

三三六二

三三六三

三三六四

ながむとて人もたのめす月もいてしたゝ山のほの秋の夕暮
あはれ又こよひの雪のいかならんまきの竹の夕ぐれの空

夜

まともまではかなき夢のみえしより春の夜はかりうき物はなし

宿からやなくこゑのほときすねぬほかなき夜は五月雨
昔とてこふともあはん物なれやなに面影の秋の夜の空

山

いたつらにおり松たきてふけし夜も猶九重のうらそかなしき

山

はつかしや花の色かにさそはれてうきせいとほぬ春の山ふみ

すゝしさをたつねもとむるゝうたにもされはと山に住人もなし

秋山は紅葉ふみわけとふ人もこゑさく鹿のねにそなめぬ

此ころの霜雪たにもおちくらぬ冬の深山のひるのさびしき

野

すみれつむ野への霞にやとかれは衣とすみ月はもうつ

夕すゝみとふひのうもりこの花やいまいくかありて秋の初風

むしのこゑ花にをく露ものことに秋は野はらのほかにやはある

たつきしのかりはのまゝ葉かれはてをのかありかのかけもかくれ

す

海

けふをみらる春の海への名なりけり住吉の里住吉のはま

この比は南の風にうきみるのよろくすしし声の屋のごと

さならても秋のおもひはおほよとの奈をつらしとら風を吹

はけしきはしはの煙たちかわてむら雲をひく冬の浦風

池

にはもせの花の白雪風ふけはいけのからみそくもりはてぬる

三三二四
三三二五

三三二六
三三二七

三三二八
三三二九

三三三〇
三三三一

三三三二
三三三三

三三三四
三三三五

三三三六
三三三七

三三三八
三三三九

三三四〇
三三四一

三三四二
三三四三

三三四四
三三四五

三三五六
三三六二

わか葉よりひく人なくてしはれにし身にぬ池のあやめ草哉
秋の夜の月に心やうかひけんむかしの人ふるき池みつ
をしかもの色にうつろふ池水にそれともみえぬあししはれは

河

春といへば空ゆく風にたつ浪の花にうつめるしら川の水

大井河夏のみむすふとまやかたみしか夜ならす月もやとらし

秋風によわたる月のすみ田河なめむ空はみやこなりとも

ゆく人のおもひかねたる道のへをいたくな吹そ冬の川かせ

田

さくら色のうつるもしらぬ山かつも田のもの花は袖にちりつゝ

小山田にしけるさ月のうき草は我心よりたねやまきけん

秋の田とてらすいなつまよそへてもみれはほとなし忘かたみに

あせつたひもうくる水もこほりぬてかり田さびしき冬の山かけ

鳥

百千鳥さへつる春もふりはてゝわか屋とならぬ花をやはみる

なれをたにまつこともなし郭公われせの中にとのみうれへて

はつかりにまた肩明とつたふともこれかは月のなごけかくへき

淡千鳥とまはる雪の跡もうし鳴てもいはんかたはなまきこに

松

谷の松をのかみとせに春やなきふるさみとりのしらぬひとしほ

夏山の松の煙にいつる雲の五月雨なからはるゝまもなし

秋の色にみねの嵐のかはるより西夕路ゆるさぬ松のこゑ哉

のこりなくわかくろかみはうつもれぬ榎の後に松はみえける

萩

あさみとりこのめ春雨ふみたりうすき霞の衣ての萩

三三三三
三三三四

三三三五
三三三六

三三三七
三三三八

三三三九
三三四〇

三三四一
三三四二

三三四三
三三四四

三三四五
三三四六

三三四七
三三四八

三三四九
三五五〇

三五五一
三五五二

三五五三
三五五四

三五五五
三五五六

三五五七
三五五八

こととはむゝまおしめぬ那公にかうも田の秋の夜ことに
なれくゝしてた葉のこらすをく露にあはての秋の秋やくらしき
鳴鹿もよその紅葉も尋こすときは秋の秋の雪の夕ぐれ

草

春日の雪の下草をのれのみはるのほかにやむすひをきけん
名もわがす岩かきぬまに引すてさ月まつへき草葉ならわは
時しらぬ宿ともさらはなりはてすなび夕暮の秋の上かぜ
秋やとは人目も草も草は猶かれてもたてる心ながさよ

花

花は春春はさくらゆへな小はこの世の色のたくひやはある
ふるさとの花橘の白竹にむかしは細はいまにほひつゝ
白露をもとあらの秋にぬきとめて風たぬめまの月をこそまて
冬こもり年のうらにはさきながらかきねのほかに句梅かえ

祝

君か代に万よめく小おとめ子かつらなる庭のいさよひの月
もろ人のちとせのふてふ御萩川ながすあさの木のほるかに
なかつ月や老とぬ露の下水にたまはるよは外の白露路
あきらけき御代の今とせといのるとて雲の上人星うたふ也

山家

霞たつみねのさわりひ小はかりおりしりかほの宿もはかなし
をくら山雲にかくる草の庵の夕ぐれいそく夏をすしき
こうはてぬかり田の面のいなすまし鳴立くれのうす露粉のやと
色にいてとにもたてす紫の庵時雨のうらそこほる涙は

旅

おきて行たひねのいほの梅からにありしなからのしのめの袖

三三六三
三三六四
三三六五

志

三三六六
三三六七
三三六八
三三六九

述懐

三三七〇
三三七一
三三七二
三三七三

叙教

三三七四
三三七五
三三七六
三三七七

草木森林随分後廻

三三七八
三三七九
三三八〇
三三八一

如果者得火

三三八二

旅まぐらしろくあふきの月影もなれてくやしき我身なりけり
白露も時雨も袖をまつそめて紅葉やと秋のたひ人
かへるさは客こもかく成ぬらし春となりといそく旅人

三三八三
三三八四
三三八五

春のよの夢にまごりて物と思ほのかにみえし月のうつしは
いとせめてうき鳥のねはおもひやれ猶みしか夜のご夜は上けにき
いかにせむしたゆふひものむすほく水とけてねぬ秋の初しも
河竹の下ゆく水のうす氷ひるばえつゝねこそなかる水

三三八六
三三八七
三三八八
三三八九

溪川春の月なみたつことに身はしつみきの下にくらつゝ
我心やよひの後の月の名に白くかきねの花さかりかな
秋の日は物おもふ人の聞なればよりしく木葉行道もなし
まつそおもふことしをいくる命にもむかふるかたのうしろめたさ

三三九〇
三三九一
三三九二
三三九三

これやそれあまなくうらふ春雨にをのくまざるよものと
除せ熱惱致法清涼
みな月の道行人をおもひしる法のすしさいたすらかひを

三三九四
三三九五

たのむかなうき世は秋の草の上にむす露霜さゆる日影を
いませる冬の霜衣のうつみ火に花の御法の春の心を
付分持内侍経教院
建保五年の春にや内裏に此韻の字をくくたまはりて詩をつく
るとつたへきとてつれくなくなりしかは耳にもなりなむかと心
にかきならへて見侍しいたつらことをおもひいてかきつく

三三九六
三三九七

春

季節寒望席餘 先花照耀是春衣

梅かえのうつす句はうすからし霞はよほはるの衣に

深風吹浪氷水尽 山氣節霞曉月微

たれか又花とこそしとせまし春とこそしふる鳥なかりせば

宿雪猶付松葉重 早梅纔綻鳥声稀

春とたにまたしら雪のふかければ山路とひくる人をまれなる

閑眠枕肩南簪目 宿鷹徒今欲北飛

谷ふかく鳥あそふ春風にまつ花のかや雲にとふらん

柳葉漸深情憾頻 林鶯啼鳥馬声新

春風のこほりとほらふ池水はやとれる月の影もあらだに

枝梅花綻映紅錦 樵斧聲生踏紫塵

吹はらふ風たにうつし梅花のころつもれ木のもとの塵

歌吹出霞登花夕 綺羅薫浴月映春

ふるさとの花と月とにこととはんこれはみしよのありし春かと

春逢四海兩年世 臨水登山遊覽人

へたつとて花うち山はかすもはす霞そうときどきの望人

節馬煙霞風景好 香秋細馬互相尋

世にしらぬおほろ月よはかすみつゝ草の原とはたれか尋ん

點點空銚花零水 先教有殘月出峯

おほ空のよことの雲も何らん花にあまねき三吉野の草

料峭夕陽春暮水 古溪昨夜曉東深

色にいてふりしく庭もうつろひぬ花みてくらす春の深さに

閑居靈物在斯処 地柳林鶯動初心

いかならんたえてさくら世なりとも明はのかすみ春の心は

三春季節徐寒暮 踰陽新開猶露内

はるにすむ山の家のときとへはやよひの月も影まとか也

霞隔南山夢跡跡 雲連寒葉碧輝天

つり舟のざとのしるへも事ととしやそ端かすむ明ほのく空

草庵雨裏送連日 花樹月明華少年

雪とのみつもればつらし春のかせ別し花のふかる年く

無事終朝帷幄望 紅梅高柳夕陽江

山人のゆくての殿てにためてししそやすむ岩のほとりに

親故知音忘旧好 忘來誰問夢叢巖

おしむらんとはれし花もちりはて、春はいくかのみねの霞と

煙生翠竹村南路 雲壁雲藤川北家

すまかてなもとの春こそわすられねあるしふりにし道のへの家

遊春漸斜庭有草 樵夫独往種無花

春はいぬあそと童の杖とそき日にとまろかたみの夕暮の花

九春斜尽然殘日 瞻望巖陰夢閑斜

こよひのみ春やかりねの華枕ゆへへのまよと影ならめ也

夏 夏来新樹葉綠時 当橋家山不得曙

霜われの冬はあらはに民のすむく屋しけり行あよにそ見る

唐橋向中閑露華 耕綱影影春風簾

影みゆるいとへの衣うらなひくあふひもすし白きすたれに

聖寿未結曉鐘危 国扇暫忘展月機

玉のとのなかきせられしういとにまかふあやめの根はほそくとも

雨後終宵軟枕聽 松声如旧水声添

すみの江の松のうへふく浪風にこの比煙のこえそうらそふ

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

三三九八

節仲夏夜初氷

夢覺愁人枕不知

かう枕またふしもみぬあしの葉にまかふ雲そくろこ夜はしろ

石竹余花多載種

庭槐一葉且待枝

さきにけり野なる草木にとも露の秋に先立枝の一枝

夕陽染影蓬村樹

微雨引涼才又池

この世にはあまはかりの光かな遠の露に月やどるいけ

漸々好風吹北牖

宜哉林席北中地

すへらきの昔あまねくみとやこのみな月の民にはとこす

凌汗總思街銀早

松廬陽令定休朝

夕立の菊のしはれ葉はらふとて花まるとに人あふさける

北窓風刀贈來客

南朝長春是殘文

さゆり葉のしらねしたにさく花の草のしけみになとましりけん

登照洲庭微月後

蟬鳴空樹夕陽梢

よるなからなまぬる^(蟬)わ行月のうつろひあへぬ庭の梢に

歸蓬霜色先秋更

地介思鯨老巨龜

みそするあさのたら葉はやとことにかはともなくなけうてつ也

秋

全賴忍生殘暑冬

独吟古葉甲殊詩

秋にたへぬことの葉のみそ色にいつる大和の事もろこしの詩り

乱風寂寥傷人夕

繚浪落花結子時

めにてたぬきねにましろからの葉も道行人の手にならず時

葉を抱定朝雨冷

草履待殘曉天邊

秋の風におきのうははそよく也事とふ庭のねこそとせけれ

蕭索庭野催閑望

露色虫声逐夜滅

うらかる秋の白露をめやわく逢か杧のものとをしけすと

(題)

秋山遠滯秋望遠

仙室銀声老故溪

そのか色のおよはぬ秋も葉かへつ嵐のつてに紅葉ちるたに

清瀟移霜銀水石

紅嵐吹浪錦江西

あかづきはかゝらむ山の月とみ^(柳)雲もとまらず秋風の西

平露露重華煙短

遠浦波高松月低

宮さの秋のむら雨すきやらすそこの花の枝とたれつ

無盡無才無阿好

琴詩鴻雪隔林携

月の色に露なへたてそ離坂みきはあしはたつさけろとも

津涼八月々明夜

無限秋風吹袖寒

露をむらやたのあさしらしたへす秋のよわたる風のさむさに

鳴枕暗香尋露底

驚書遠鴈出雲瑞

秋の夜と虫のなくくうれふともつきしおもひの露のかたはし

孤燈背壁曉亭斷

急雨瀟瀟陽景殘

昔みし秋やいくよの古郡にいまも在明の月そのこれる

鷄犬多稀隣里靜

遠村人定漏才聞

あさなくくちゆく秋の下紅葉うつろふ露も秋やたけぬる

万物衰衰蕭瑟促

流年徐暮半空過

うつもれて木の葉とさそふ谷川のしられぬ浪に秋を過める

芳蘭為笑殘花碎

枯葉滿階明月多

なめついくとしく秋の月あらしかはのなきそおはかる

露染湘山千嶺樹

風清桂水九秋浪

たつた川神代もきてふりにけりかくれなみのせこのうき浪

寶篋羅杆何霜忌

醉客徒誇白髮秋

そのつから秋のあはれを身につけてかへるここの夕暮の奇

短簾愁掃雲物冷

蕭索寒色望空幽

三四二

三四三

三四四

三四五

三四六

三四七

三四八

三四九

三四〇

三四一

三四二

三四三

三四四

三四五

たれかすむはやまかしたの秋風に煙とほろゝ道もかすかに

且數桐華山人路 送別秋花南客舟

秋の夜の月にいづともわかしかしとのかよわたるあまのつり舟

麟科院寒秋上月 行衣ヲ薄袖中秋

露くれ心やすめぬく／＼にすくはこりぬとかのへの秋

秋風吹車空傳涙 白露聲寒似留連

こけのうへに昨日のものみらたすてゝ秋の林に誰あそひけん

冬

四運回環值節候 全風不駐屬玄冬

たとやめのかふる心に染つくす紅葉もしろしきたる冬とは

長河霧外太行客 遥嶺嵐中送遠鐘

さためなき嵐にはる山かけのくもりはてめるいりあひのかね

籬有殘花纏紫菊 林無黃葉只蒼松

色くに菊も紅葉もうつろへと春のよくなる庭の若松

都門路僻今誰問 霜上独望廣塵蹤

うすくこよもの紅葉と吹ひけてかたもさためめ木枯の跡

地民收稼孟冬節 田畝有年五國娛

とみ衣白とすへてさかつきのめくみによへるよはそだのしき

治世伝声鳴沢鶴 敬神吟社在汀危

かけうつす山の青葉も冬かれてさびしき池にのころとしかも

時風松雨斜陽見 寒溪閉水流水無

ふりまざるよしのしみゆき跡たえてもらぬ岩屋は音信もなし

掩勝終朝頭木流 賢愚道遠跡尤殊

老らくのとしのとなかき冬の亭者と今と身こそことなれ

武暮時思往事 当初出櫓尚難堪

三四四六

思いつる雪ふるとしよとのれのみまきはるよのうきにたへたる

侵頭霜色白過羊 憶子鵲手蘇第三

白たへの色はひとつに身にしめし雪月花のおうふはみつ

南老客客遺積雪 鄭公旧跡問溪嵐

年くれて松きりしつの子の上にとひてを帰る客の嵐と

家情心倦宿抛我 寒月寒簾子誰談

わかともとみしはすくらき年の暮序かたにもたれにわたらん

詩中請至相府御点

三四五〇

但仲人望僅三四年秋 養和百首振露之後猶可詠堀河院難之由有

自文治建久以來紛新 嚴訓仍存永元年又詠此等今見之一首無可

儀非歎遠唐并為天下 採用之并仍漏棄了初傳筆之当初詠出此詩

貴賤根思已欲根并置 時父母恩深感淚將未可長此道之由根放返

及正治建久蒙天滿天 砂隱信朝臣駿達等面々吐實觀之詞右大臣

神深助成至聖朝之 故有秋美御消息便是秋美御消息之漢時之人

初受催催象跡猶携此 望之以為始依思此往事更書如此與秋美面

連事秋而不成 之思

三四五四

春廿二日 堀河題略之

「立春」

かすか山ふものと今とに雪きて春をしらす春の松風

「子日」

三四五七

三四五六

三四五八

三四五九

三四六〇

三四六一

三四六二

子曰するをしほのへの小松原はるかにみゆる千代のをひすゑ

三四六三

〔霞〕

みわの山がすみと春のしるしとてそこもみえぬ杉のむら立

三四六四

〔鶯〕

春さぬといはせのものの鶯のはつねとたれにつけはしむらん

三四六五

〔若菜〕

春をあざみさえあへぬ雪とつみそへてわかなを春のかたみなりけり

三四六六

〔残雪〕

枝しけき杉の木陰に消やうて雪さへともるあふさかの閑

三四六七

〔柳〕

なひけともさそひもはてぬ春風にみだれをよさる青柳のいと

三四六八

〔梅〕

あらまなくこの世を身にもしむるかな梅かえすくる風のなごりに

三四六九

〔早蕨〕

たにせはみさかしも岩の下わらひいかにあるへさかけ路なららん

三四七〇

〔花〕

なへてにそおしもしもせまし様はなおもへはなにの契なららん

三四七一

〔春雨〕

つねよりなめめはまさる春雨の雲まをたにもとふ人はなし

三四七二

〔春駒〕

つなたててあれにしこまを春野の花のあたりははなれさうける

三四七三

〔帰雁〕

ゆく雁の霞の衣たらかさねかへるもきたる心ちこそすれ

三四七四

〔叫子鳥〕

あしきこの屋てふかたにやとわらん人よふ鳥こそもひまなし

三四七五

〔苗代〕

かた／＼にまかするを田のなほしろの水にせかる春の山みう

三四七六

〔莖〕

ふるさともあれゆく庭のつほすみれた／＼これのみや春としらん

三四七七

〔杜若〕

いかにしてあさ／＼はぬまのかきつはたむらさきふかく匂をめけん

三四七八

〔藤〕

九重のみかきの藤の花さかり雲井にくものたつかとそみる

三四七九

〔秋冬〕

すまかてに心そうつる玉川のかげさへにはふやまふきの花

三四八〇

〔暮春〕

おもひかねむなしき空をなむれはこよひはかりの春風を吹

三四八一

〔夏十五首〕

〔更衣〕

花の色とおしむ心はつきもせて袖はひとへにかはりぬるかな

三四八二

〔卯花〕

やさきかすく／＼とわく影としうしとて月なまよひにさゆる卯花

三四八三

〔葵〕

いくとせか神のみ山におひぬらん二葉にみゆるあふひなれとも

三四八四

〔郭公〕

おもひねの夢うになる郭公き／＼あはすへき一ちもかな

三四八五

〔菖蒲〕

夏／＼もたものとみかはあやめ草心にさへそけふはか／＼れる

三四八六

〔早苗〕

水まさる山田のさ／＼雨ふれはみともふかくなりにける哉

三四八七

【照射】

ともしするほくしの松のさえて後やみにまふはこの世のみかは

三三八

【五月雨】

五月雨はあまのかはらもかはらんやへたつ雲の浪のふかさに

三三八九

【蘆橋】

夕まくれ花たらはなに吹風よくればあまとおもひける哉

三三九〇

【螢】

やみといへはまつもえまざるはたるもや月になくさむ思はるらん

三三九一

【蚊遣火】

さらてたにいふせやとそかやり火にくゆる煙のたぬよもなく

三三九二

【蓮】

はらすはのにしに契のふかけれはうへこそ露に秋そうかへる

三三九三

【氷室】

夏の日のてらすにこほる氷室山こほりならぬ身をやうらみん

三三九四

【泉】

むすふてにいはいもる水とせきとめて夏の日かすをすくしつるかな

三三九五

【荒和袂】

みそき川なかすあさらと吹風に神の心やなひきはつらん

三三九六

秋甘首

【五秋】

あまたき露はこめねとみむろ山秋のほかにたりにける哉

三三九七

【七夕】

七夕のあひみるとしはがさなれとなるへほどなき天のは衣

三三九八

【萩】

露わくろのはらの萩の花すうは月さへ袖にうつるなりけり

三三九九

【女郎花】

をみなへしおるもおしまぬしら露の玉のかむさしいかさまにせん

三五〇〇

【薄】

あたしの風にみたるいと薄くる人なしにまねくらん

三五〇一

【力董】

風すくるかやかしたねの露はかりほとなき世をや思みたれん

三五〇二

【蘭】

秋のきてはころひめとやふらはかますそのはらのよもにほへる

三五〇三

【萩】

萩原や露のたえまに風ふけは色も身にしむ物にそ有ける

三五〇四

【雁】

秋くれはたかことつてとまたねとも心にかゝる初かりのこま

三五〇五

【鹿】

山さとの秋のねさめのさひしきはつまと小鹿きたのみなりける

三五〇六

【露】

した草のうへとやよそに思はましゆく人もなも露のふかさと

三五〇七

【霧】

なかくする夕の空も霧たらぬへたうり行はむかしのみかは

三五〇八

【種】

晩の夢のなこりをなかくむれはこれもはかなきあさかほのはな

三五〇九

【駒迎】

ひきわたす閑の杉むら月もれはみなかけふらの駒とこそみれ

三五一〇

【月】

なかしともおもひはてまし秋の花にあくるもつらき月の影哉

三五一一

【持衣】

さひしとまたうらそふる秋かなととね雪の友ときけとも

三五二

〔虫〕

つれくとなかむる宿の夕ぐれに人まつしの事もおします

三五三

〔菊〕

しら菊の心しかはる花ならは色うつろはぬ秋もあらまし

三五四

〔紅葉〕

秋くれてふか紅葉は山粧のものをける色のかまりなりけり

三五五

九月月尽

けふのみとおもはぬそらのくるゝたに秋のゆふへは夜ならずや

三五六

冬十五首

〔初冬〕

いかなれやよものまきはかれはてゝ猶冬こもるみやまへのさと

三五七

〔時雨〕

紅葉はやしくるゝまゝにちりはつるまたも野山の色かはりゆく

三五八

〔霜〕

うりのくる紅葉もかはる朝霜の秋のかたみほをかぬなりけり

三五九

〔雪〕

おいはつる谷の松かえうつもれて雪さへいとふりにける哉

三五〇

〔霰〕

ありま山おろす嵐のさひしきに霰ふる世ぬなのさゝ原

三五二〇

〔寒 雪〕

あまを丹やうたつさはるあしの葉に心もとまる今朝の雪かな

三五二二

〔千鳥〕

むしあけの松ふく風やさむからん冬の夜ふかく千鳥鳴也

三五二三

〔水〕

なには江のこほりにとつるみをつくし氷のふかすのしるしとをみる

三五二四

〔水鳥〕

水鳥のうねよなには寒に氷と霜とむすひとまけん

三五二五

〔網代〕

夕ぐれはあしうにかゝるひおゆへに人もたゞよろうの川なみ

三五二六

〔神楽〕

あまの戸のまた明やらぬ月影にきくもてやけきあかはしのこえ

三五二七

〔鷹〕

雪ふかきかたの、道とふみわけてたえぬひつきのみかりをそする

三五二八

〔炭竈〕

すみかまのやくとつま木をこりつめて煙にむせふをのゝさと人

三五二九

〔埋火〕

みるまゝにやがて消ゆくうつみ火のはかなき世をまたのみけるかな

三五三〇

〔歳暮〕

あくるよりくれぬとのみをおしまるゝけふはことしのかまりと思へ

三五三一

志十首

〔初志〕

あふまての契ならすはいかゞせむかはかり人と思ふめても

三五三二

〔忍 志〕

あはれとも人にしるるゝ思たにつもるはいかゞあらまなき世と

三五三三

〔不達志〕

さよ衣うらみを人にかさねつゝあはてや世々をへたてはつへき

三五三四

〔初達志〕

むすびてもなかくぬるゝたもと哉あふくま川のふかき思に

三五五

〔後朝志〕

しほりするは山かみねの露けきかへるに道はまよはぬ物と

三五六

〔済不遇志〕

あひみてもあはてもおなしなけきにてちかひしことはかりはてぬ
る

三五七

〔旅志〕

秋はきの下葉をむす小草枕色つく袖の露をまかへよ

三五八

〔思〕

あさよしやあさまのたけにたつ煙たえぬおもひをしる人もなし

三五九

〔片志〕

あらしなくはなけく存もたえぬへし忘れはつるなかも契に

三六〇

〔恨〕

ゆくすゑと思ふもかなし心からこの世ひとつのうらみならねは

三六一

〔雑首〕

〔眺〕

さならても袖やはかく山里の嵐のかせのあかつきのこゑ

三六二

〔愁〕

いかなうしこすゑなるらむかすか山松のかはらぬ色をみるにも

三六三

〔竹〕

さねふかさねさめにそよくくれ竹や昔も人の友となりけん

三六四

〔芭〕

こけも又いたつらにてをおいにける岩ほの中もたのみなのよや

三六五

〔鶴〕

あしたつのこれにつけてもねとそなく吹たえぬへき和井のうら風

三五四六

〔山〕

跡もかなたつねてもみんなしほはういにしへさまにかへる山か
と

三五四七

〔河〕

よしの川若うつ浪もよとよみにそくたけけんしる人はなし

三五四八

〔野〕

みやきのこの下露にくらへば雨よりけなる袖のしつくと

三五四九

〔関〕

人しれぬなけきはすまの関またひとのみこえて月日へぬれは

三五五〇

〔橋〕

くらぬとも名ほうつもれしあらしなく跡もなから橋をみるにも

三五五一

〔海路〕

ひとやうのみちかはあやのわたのはらかへる浪にほめのみたらつゝ

三五五二

〔旅〕

草枕たひよりたひの心ちして夢にみやこをほのかにそめん

三五五三

〔別〕

わすれぬる日かすとのみやなけかましとるにかな小命なりせば

三五五四

〔山家〕

たれにかはみせもきかせもみちのはら山さとのあり明の月

三五五五

〔田家〕

すこかもる山田のなる風ふけはそのか夢をやおとろかすらん

三五五六

〔樓旧〕

ふりにけるそのみつきの跡ことに人の心をみるそかなしき

三五五七

〔夢〕

うき世をばゆめの中にも思ひしれ哉ならぬ身の心ちやはする

三五五八

「無常」

はかなさのたのしと見ゆるいなつまの光も又はてくこそすれ

三五五九

「述懐」

くらゐ山ふもとの雪にうつもれて春のひかりをまつそ久しき

三五六〇

「祝」

よろつ代の光を袖にくもりなきはこやの山のみねの月か門

三五六一

是猶不足言哥也 後發有恥

雜哥之中歌末百首尤可秘處也

後是為証本也

正徹在判

以老僧自筆本書字

校合畢

正広在判

此首藤川之百首トテ世三用也

詠百首知哥

春廿首

閑路早春

たのみこしせきの藤川はるきてもふかき霞に下むすひつ

湖上朝霞

朝ほらけみるめなきさの八重霞えやはふもとくしかの浦風

霞隔遠樹

三輪の山まつさかすむはつせ川いかにあひ見ん二もとの杉

霧中閑鶯

宮こ出てとを山とりのかり衣なくねともなへ谷の鶯

隣家竹鶯

山かつのそのふに近くふしなれてわか竹かほにいとふ鶯

田辺若菜

を山田の氷にのころあせつたひみとりの若菜色すすくなき

野外残雪

かすか野は昨日の雪のきえかてにふりはへ出る袖をかすそふ

山路梅花

色もかしらてはこえし梅花にはふ春へのあけほの山

梅薫夜風

にはひくる枕にさむき梅かたにくらき雨夜の星やいつらん

水辺古柳

年月もうつりにけりな柳かけ水行川のすえの世の春

雨中待花

けふよりやこのめも春の桜花おやのいさめの春雨の空

野花留人

玉きはるうも世わすれて閑花のちらすは千世も野への諸人

遠望山花

色まかふまことの雲やましろらんまつはさくらの四方の山のは

晚庭落花

あかなくにとのか衣に吹風ににけのみとりも花をわかれ

故郷夕花

さとあれぬ庭のさくらもふりはてきたをかれ時と問人もなし

河上春月

行春のなかれてはやきみなの河霞のふらにくもる月かけ

深夜帰鴈

春の夜の八こさの鳥もなぬまにたのおの鴈の急よらん

藤花随風

まつ風のこえもそなたになひくらしかられる藤のすえもみたれす

橋辺秋冬

はし枝色に出けることのはをいはてやにはふ山ふきの花

船中暮春

けふはなを霞をしくく友舟の春のさかひをわすれすもかな

夏十首

卯花隠路

うのはなの枝もたはらの露をみよとはれし道の昔かたりは

初聞郭公

昨日こそ霞たちしか郭公又うちけふくこそそのふるこえ

三五七二

三五七三

三五七四

三五七五

三五七六

三五七七

三五七八

三五七九

三五八〇

三五八一

三五八二

三五八三

山家郭公

このさとはまらもまたすも郭公山とひこゆる便すくすな

池朝昌蒲

あくるよりけふ引あやめ池水にをのか五月をなれてわかるゝ

閑居蚊火

こからとて煙もみえし時しらぬ竹のは山のおくのかやり火

塵桶驚夢

袖のかは花たはなにのこれともたえてつれなき夢の面かけ

杜五月雨

館人のほさぬためしや五月雨の雲にくたす衣牛のもり

野夕夏草

あたし野のさかやが下葉誰ためにみたれをめたる暮を待らん

洞底螢火

日かけみすさきてとくら色もなし合は螢そひかりせけり^(三)

行路夕立

夕立に袖もしほるゝかり衣がつうつり行をとるかたのくも

秋廿首

初秋朝風

秋来ぬとふ斗なる逢生にあさけの風の心かはりよ

瀾月七夕

天河ふ月は名のみかさなれとくもの衣やよそにぬるらん

野亭夕萩

秋萩にまぬく野への夕露をよしやみだせて宿なからみん

江迎曉萩

明わたる萩のすきはのほのくゝと月の入江をいつるふな人

三五八四

三五八五

三五八六

三五八七

三五八八

三五八九

三五九〇

三五九一

三五九二

三五九三

三五九四

三五九五

山家初雁

秋風の雲にまじれる嶺こえて外山のとこに雁はまにけり

海上待月

あはらしま秋なき花をかざしもていつるもをそいさよひの月

松風夜月

袖らかき色やみとりの松風にぬるゝかほなる月をすくなく

深山見月

花ならはいたくなわひそと斗にみやまの月を人やとはまし

草露映月

むさし野につらぬきとめぬ白露の草はみなから月をこほる

閑路惜月

逢坂はかへりこむ日をたのみにて空行月の閑守そなき

鹿声夜友

山さとの竹より外のわか友はよるなくゝかの庭の草ふり

田家掃衣

露霜のおくゝの山田吹風のもよほすかたに衣うつと

古渡秋霧

夕雲勢にこゝとひわひぬすみた川わか友舟も有やなしやと

秋風涵野

宮木野はこの下露もほしはてはらひもやまぬ四方の秋風

籬下聞虫

みたれ落る萩のまかきの下露に泪色あるまつむしのこゑ

紅葉写水

山河のしくれてはるゝもみらはにおられぬ水も色まさりつゝ

三五九六

三五九七

三五九八

三五九九

三六〇〇

三六〇一

三六〇二

三六〇三

三六〇四

三六〇五

三六〇六

三六〇七

山中紅葉

やまのくる時雨のおくのみみはのいく入とかこれ出らん

三六〇八

露底種花

秋風のうら葉にため白露のしほらていたす朝かほのはな

三六〇九

川辺菊花

大井河あせきの波の花の色をうつり捨てる岸のしと菊

三六一〇

独惜暮秋

又人のとはぬもうれし草木たになれてはおしき秋の名残を

三六一一

冬十首

初冬時雨

けふそへにさそ時雨のそとつれて神な月とは人にしられぬ

三六一二

霜埋落葉

朝霜のそめのみみらは思しれをのめ下なるこけの心を

三六一三

屋上聞露散

まきのやに露散の音もとたえつ風の行まになひく村雪ま

三六一四

古寺初雪

むかしへや何山姫の布きらす跡ふりまかへつふる初雪

三六一五

庭雪厭人

わかやとはけふこんにわすられぬ雪の心に庭をまかせて

三六一六

海辺松雪

すみよしのまついつことふる雪になめもしらぬとをづ舟人

三六一七

水御寒声

芦のはも下おれてこみしま江の入江の月にかけもはらす

三六一八

湖上小鳥

にはのうみや月まつうのさ夜小鳥いつれの嶋をさしてなくらん

三六一九

寒夜水鳥

置とめす松を風のほらふ夜はかもの青葉の霜をかななる

三六二〇

歲暮潤氷

いまいくかうらいつる波のはつ花も谷の氷のしたに待らん

三六二一

恋二十首

初尋縁恋

おもひあまりその里人にこころはむおなじ岡へのまづはしるやと

三六二二

聞声思恋

秋の霜にうつろふ花のなほかりもかけすよ虫のなくねならねは

三六二三

忍親眼恋

めもはるにもえてはみえし葉の色さきのへの草葉也とも

三六二四

祈不逢恋

ゆさかへり逢せむしらぬみそき川かなしき事は教まきりつ

三六二五

旅宿逢恋

立田山木葉の下のかり枕かはすもあたに露路こほれつ

三六二六

兼厭晚恋

今夜たにくらふ山の宿もかな暁しらぬ夢やさめぬと

三六二七

帰無書恋

朝露はさへ分る袖もほしかわてゆめかうつろかと小人もなし

三六二八

遇不会恋

よそ人は何中くの夢ならうてやみのうつこの見えぬ面かけ

三六二九

契経年恋

秋かけてふりしく木葉いくかへりむなしも春の色にもゆるん

三六三〇

疑真偽恋

たかまこと世の偽のいかならんたのまれぬへき筆の跡かな

三六三一

返事増恋

たちなひく煙くへにもえまざる思の新身はこかれつゝ

被服賤恋

色に出でいひなほりそくく戸のあけなからなる春の袂と

途中契恋

みろへの井ての下帯引むすひわすれはつらしはつ草の露

徒門帰恋

思やれむくら門のさしなからきてかへるさの露の衣手

心住所恋

いかにせんたのめしさとを住の江の岸は生てふ草にまかへて

依恋祈身

なかくれよあらはあふよと手同して年のを祈るものしめ縄

隔遠路恋

わたつみやいくうくくにみつしほのみらくすくき中の通路

借人名恋

かうそめのたかなのりそになひくらんわか身の方は絶ぬけふりを

絶不知恋

あふひ草人のかざしかと計も名をたにかけて問方もなし

互根絶恋

もしは草あまのすさひもかき絶ぬ里のしるへの心くらへに

雑廿首

暁更寝覚

明やらの鳥のわふかく置霜にわさめくらしくよの古こと

薄暮松風

うへ置しわが物からの庭の松夕は風のこえそくやしき

雨中緑竹

色かへぬ青葉の竹のうきふしに身を知雨のあはれ世中

浪洗石苔

はやせ川岩うつなみの白妙にこけの杖も色をつれなき

高山待月

ひらの山みねの木からしほふよはにきよも月を待かな

山中滝水

雪ふかきあたりの山につまれて音のみ落る滝のしら玉

河水流清

秋の水きよ滝河の夕日か竹木葉もうかすくもる計は

春秋野遊

おなく野の霞も霧も分なれぬはつねのこ松まつむのこえ

閑路行客

行人のかたみもあたにとく露を吹なほらひを閑の杖かせ

山家夕嵐

暮かゝる四方の草木の山風にをのれしほる紫の袖かき

山家人稀

故郷どののふる人やわたしけんさてもとほれぬ谷のかけはし

海路眺望

しるらめやたゆたふ舟のなみまより見ゆるこしまのものと心を

月野中友

夕月夜宿かりそめしかけなからいく有明の友とかならん

旅泊夜雨

たひ衣ぬくや玉の緒よるの雨は袖にみだれて夢すむすはず

海辺曉雲

三六三二

三六三三

三六三四

三六三五

三六三六

三六三七

三六三八

三六三九

三六四〇

三六四一

三六四二

三六四三

三六四四

三六四五

三六四六

三六四七

三六四八

三六四九

三六五〇

三六五一

三六五二

三六五三

三六五四

三六五五

あけぬとてとまりこき出る反舟の星のまきれに雲をわかれ
 三六五六

寄夢無常

まどろめはいやはかななる夢のうらに身をいくよとてすめぬ嘆
 三六五七

そ

寄草述懷

引するためしもかなしきつめしきとろの道のもとにくらほを
 三六五八

寄木述懷

九重のとのへのあふらわするなよ六すの友はくちてやみぬと
 三六五九

逐日懷旧

天の戸のあくる日ことに思ふとしてしくぬ昔はたちもかへらす
 三六六〇

社頭祝言

いのちより神もさこそはわかふらめ君あきらかに氏やすくとは
 三六六一

四季題百首の「花の歌(三三七〇—三三七三)のうち、

「古郷の……(三三七〇)」「ふゆこもり……」(三三七三)の

歌なくして、次の二首を加へたる本あり。

大才にいとひなれたる夏の日のくるるもおしは撫子の花

三六六二

やまかつのかきねにむるむめの花としのこなたにまつ匂ひつゝ

三六六三